

2-32-1 龍源院

大徳寺の塔頭の一つで、大徳寺南派の本庵である。

文亀2年(1502)に大徳寺第72世住職・東溪宗牧を開山として、能登(現在の石川県)の領主・畠山義元が豊後(現在の大分県)の大友義長らとともに創建した。

方丈、玄関、表門(すべて重要文化財)はいずれも創建当初のもので、方丈は大徳寺山内最古の建物と言われ、禅宗の典型的な形式を示している。

方丈の南、東、北に趣の異なる三つの庭園があり、北側に広がる龍吟庭は、苔の上に三尊石が建つ須弥山式枯山水の名庭で、室町時代の作と伝えられている。南庭(方丈前庭)は、白砂の大海に苔と石組で鶴亀を配した蓬莱式の庭園、また、東の東滴壺は日本最小の石庭と言われ、1滴の波紋から大海原の広がりイメージさせている。

このほか、庫裏の南側には聚楽第の礎石を配した阿吽の石庭がある。

寺宝として、豊臣秀吉と徳川家康が対局したと伝えられる四方蒔絵の碁盤、天正11年(1583)の銘がある種子島銃などを蔵している。

昭和前半頃、金龍院の墓地が龍源院に移されている。金龍院は明治時代に入ってから、廃寺となった。

京都市
説明板より